様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３０１２１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３１２

研究課題名（和文）英語授業におけるUDLを意識した教師のICT活用に関する研究

研究課題名（英文）A study of teachers' ICT use with consideration of universal design for learning in EFL classes

研究代表者
沢谷　佑輔（Sawaya, Yusuke）

北海道文教大学・国際学部・准教授

研究者番号：１０７３３４３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、現在の現職の英語教師が、どのように支援が必要な生徒達に支援をしているのか、どのように授業でICTを活用しているかの現状を把握すること、そして日本人英語教師が、「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」を意識した授業の利点や必要性を理解すると英語の授業でどのようにICTを活用するのかを調査することである。本研究の結果、現職の小学校、中学校、高等学校の教師たちは、学習者の発達段階や学年に応じた支援やICT活用を行っていることがわかった。また、英語の教職課程在籍の学生にUDLの指導をした結果、希望の学校種に合わせて指導の前後で授業中のICT活用の目的や認識の変化が異なることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習者の様々なニーズに応じられるように、教師が柔軟な教材、指導技法や方略を提案するというUDLの考え方が注目されてきているが、英語授業におけるUDLの観点からの具体的なICTの活用に関する効果はまだほとんど調査されていないため、この分野における研究結果の蓄積はなされていない。本研究で得られた結果は、どのような学習者も分け隔てなく参加できる英語授業運営に向けた教材作りに大いに参考にできるものであり、さらにはICT活用やUDLに関する内容の教員の研修の指導項目の策定の一助となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to understand the current situation of how in-service English teachers support students with special needs and how teachers use ICT in their English classes, and to examine how Japanese English teachers utilize ICT in their English classes when they understand the benefits and necessity of instruction considering a framework of "Universal Design for Learning (UDL)". The results of this study showed that in-service elementary, junior high school, and high school teachers provide support and use ICT according to the developmental stage and grade level of their learners. In addition, the results of teaching UDL to pre-service teachers showed that the purpose and perception of ICT use in the classroom before and after the instruction varied according to the type of school where they want to work as a teacher.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語授業　UDL　ICT活用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在、小・中学校の通常学級には 6%程度の割合で特別な教育的支援が必要な児童生徒が在籍している可能性があると言われている（文部科学省, 2012）。このことから進学率が 97%を超える高等学校においても特別な教育的支援が必要な生徒が多く在籍していると考えられる（文部科学省, 2009）。しかし、特別支援が必要と教師が認識している児童生徒のうちの 18%ほどしか正式に支援が必要であると認定されておらず、教室内での個別の配慮・支援を行うことに十分理解されていない現状にある　（内田ら, 2015）。

そのような状況下で、通常学級の中で学ぶ、特別な教育的支援が必要な学習者に配慮する授業が他の学習者にも利益があるとして、現在注目されているのが「学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning, 以下、UDL）」である。UDL は、「すべての学習者に対する学びの実現を目指したカリキュラム開発のための枠組み」であり(CAST, 2011; 加賀田他, 2016)、(1) 取り組みのための多様な方法の提供、(2) 提示 （理解）のための多様な方法の提供、(3) 行動・表出のための多様な方法の提供の３つの原則から成る。

CAST（2011）では、UDL の原則を使い、それぞれの学習者に合わせたカリキュラムをカスタマイズするためには ICT が重要な役割を果たすと述べている。現在日本において ICT 活用に関する政策が実行に移され、ICT を用いた授業の実践例や研究報告がなされるようになってきた。しかし ICT を授業でただ活用したとしても、必ずしも効果があるとは限らない。英語授業に限って言うと、ICT 自体が英語力を向上させるのではなく、教師の指導力の中に ICT 活用が取り込まれることによって学習者の英語力の向上に結びつくのであり、教師の指導力が教育効果に大きく影響すると述べられている(吉田, 2014)。ベテランの教師でさえ、ICT を活用した教育内容や方法に関しては意識が向くものの、学習者の視点から ICT 活用を意識するのは難しい現状であることが言われている（東原・渡邉, 2013）。UDL はすべての学習者が分け隔てなく参加できる授業を行うために、重要な概念だと考えられるが、実際にこの視点を意識した授業の実施は学校種によっては差異が見られることがわかっている（中村, 2016）。さらに英語に関しては外国語であり、科目特有な配慮が必要な可能性が高い。それにもかかわらず、他の科目から比較しても教育的支援の観点から検討された実践の報告や研究報告は非常に乏しい現状にある。また、現状として ICT の活用には意識は向くものの、学習者に対してどのような ICT 教材を使用して、どのように教えるかというように ICT を活用して指導する能力を教師は身に付ける必要があるが、どのように現役の教師にその能力を身につけさせるのかに関してはほとんど研究されておらず、まだ手掛かりが少ない。

２．研究の目的

以上のような背景から、UDL や特別支援の視点を意識した授業の利点や必要性を理解した英語教師はどのように ICT 活用をするのかを最終目的とする。具体的には以下のように研究を進める。

1. 英語教師の特別な教育的支援が必要な学習者への意識や UDL についての知識に関する実態を明らかにする。
2. 英語教師の ICT の活用実態(使用機器と使用の意図)を明らかにする。
3. 英語教師は授業に UDL の視点や特別支援の視点を取り入れることで ICT をどのように活用しようと考えるのかを明らかにする。

３．研究の方法

研究 1 では、まず、小学校の外国語活動の担当教師、 中学校の英語教師、 高等学校及び高等専門学校の英語教師の計 16 名の、外国語活動・英語の授業中の指導に困難を感じる（た）児童・生徒の有無、その指導上の困難と実際に行った配慮を問う質問の回答を分析対象にした。そしてその結果を小学校の教師と中学校・高等学校（高専）の英語教師で比較をした。

また、小学校の外国語活動の担当教師、 中学校の英語教師、 高等学校及び高等専門学校の英語教師に、UDL にかかわる実践についてのアンケートに回答してもらい計 15 名の回答を分析した。アンケートの質問内容は UDL の知識の有無、授業を組み立てる際に UDL の視点を生かしてしている工夫を、UDL ガイドラインを参照しながら答えてもらうものであった。この結果も小学校の教師と中学校、高等学校（高専）の英語教師で比較をした。

研究 2 に関しては、小学校の外国語活動の担当教師、 中学校の英語教師、 高等学校及び高等専門学校の英語教師の計 14 名のアンケート結果を分析対象とした。そのアンケートの質問項目は、授業中に使用している ICT 機器、その使用方法と使用の意図を回答してもらうものであった。そしてそのアンケートの回答を小学校、中学校、高等学校の学校種間で比較した。教師の ICT

活用に関しては、山田（2016）の SDC モデルと UDL の３原則を用いて、分析を行った。
　最後に、研究 3 は、英語教職課程を履修している 7 名の外国語学部所属の大学 2 年生を分析対象に、ホール他（2018）で紹介されている指導内容を参考に組み立てた、UDL の指導を行い、その前後で同じ質問項目の「授業づくりに対する意識」、「ICT 活用に対する意識」を問うアンケートに回答してもらい、意識の変化を検討した。「ICT 活用に対する意識」のアンケートに関しては、UDL の 3 原則と為田（2022）の教育 ICT 活用の目的 9 類型を用いて分類した。

４．研究成果

　研究 1 の結果として、教師は、学校種問わず外国語活動・英語授業において、多岐にわたる児童・生徒に対する指導上の困難を抱えていることがわかった。また、支援の方向性としては、小学校においては一緒に活動に参加するような教師主導型の支援が行われており、中学校、高等学校（高専）に関しては個別に教材を用意して取り組ませる合理的配慮や、評価基準を工夫するなど本人主体で学習に取り組むようにできる工夫といったように児童・生徒の発達段階に合わせた指導が行われていることがわかった。一方で、 小学校教師には中学校、高等学校（高専）の英語教師が行っていなかった、 児童が安心して授業に参加できるような学習の見通しを持たせる支援を行っていることがわかり、 教室にいる全ての児童を参加させようという授業のユニバーサルデザインを生かして児童の支援を行っていることが示された。それに対して、中学校、高等学校（高専）の教師からは、 音声中心で授業が展開される小学校にはあまり見られなかった生徒の文字指導や語彙指導に対する困難が報告されていた。
　また、小学校の外国語活動担当教師における UDL についての知識と、授業における UDL の視点に関連する授業実践上の工夫の実態を、英語教育の専門性がより高いと思われる中学校及び高等学校の英語教師と比較して検討した。その結果、UDL の知識や授業の組み立ての際の意識に関する自己評価に関しては差がみられなかったものの、実際の授業で行っている UDL に基づいた実践上の工夫においては、小学校教師の実践には中学校、高等学校の英語教師にみられなかった学習者をいかに活動に参加しやすくするかという観点の工夫が多く見られることがわかった。
　研究 2 では、分析の結果、 UDL の「提示 (理解)」の原則かつ SDC モデルの 「発展」の段階の事例が最も多かった。 そして、英語の授業における ICT 活用に関しては、学習者の発達段階や学年に応じた学習内容が最も影響している可能性が高いこともわかった。 最後に特別支援が必要な児童・生徒を含む全ての児童・生徒に有効な授業の ICT 活用を行う場合は, SDC モデルでいう「発展」の段階以上の実践が必要であることが予想できる結果が得られ、この点においてはさらなる検証が必要である。
　最後に研究 3 では、UDL の指導の結果、授業づくりの意識に関しては, UDL の観点を用いて授業を行うのが重要であると考える学生がいる一方で、合理的配慮の方が現実的であるという回答も見られた。また、ICT 活用に対する意識は、中学校教師志望の対象学生は、UDL の指導の前には, 主に「教材拡充」を目的とした UDL の「取り組み」の原則に当てはまる ICT 活用が重要だという意識を持っていたのが、学習後には、「理解促進」を目的とした「提示（理解）」の原則に当てはまる ICT 活用が重要だという意識に変化した。一方で, 高等学校志望の学生は、指導前には主に「授業の効率化」を目的とした「提示（理解）」の原則に当てはまる活用が重要だと認識していたのに対して、指導後には「表現手段拡充・思考手段拡充」を目的とした「行動・表出」の原則に当てはまる ICT 活用が重要であると変化し、卒業後の志望校種によって ICT 活用への認識の変化が異なることがわかった。

参考文献

CAST. (2011). *Universal design for Learning guidelines version 2* (日本語訳 金子晴恵，バーンズ亀山静子)

内田慈子・西山久子・納富恵子（2015）.「学びのユニバーサルデザインによる中学校国語科授業実践—特別な教育的支援が必要な生徒を含む学級全体の学習意欲と学業達成に焦点を当てて—」『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』5, 23-30

加賀田 哲也・吉田 晴世 ・ 阪上 瑞穂（2016）.「UDL に基づく英語授業実践:－大阪教育大学附属平野地区での取組－」『コンピュータ＆エデュケーション』40, 44-48.

為田裕之（2022）. 『学校のデジタル化はなんのため？教育 ICT 活用の目的 9 類型』さくら社.

中村洋（2016）.「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた通常学級の授業の考察 : 生徒、教員対象のアンケート調査を基に 共同研究 (英語教育関連の調査・アンケートの実施と分 析)」『Eiken bulletin』28, 130-138

東原文子・渡邉貴之（2013）. 「通常学級の ICT 活用は「学習のユニバーサルデザイン」になり得るか : プロジェクタ利用 1 年目報告会の教師の談話分析から」『年会論文集』29, 370-373

ホール・トレイシー・E, マイヤー・アン，ローズ・デイビッド・H（編著），バーンズ亀山静子（翻訳）（2018）『UDL 学びのユニバーサルデザイン: クラス全員の学びを変える授業アプロ

ーチ』東洋館出版.
文部科学省（2009）.『高等学校における特別支援教育の推進について―　高等学校ワーキング・グループ報告―』
文部科学省（2012）.『通常に学級に在籍する発達障がいの可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』
山田智久　（2016）.「日本語教師を取り巻くテクノロジーの変遷」吉岡英幸・本田弘之（編）『日本語教材研究の視点　新しい教材研究論の確立をめざして』（pp.174-194）くろしお出版
吉田晴世（2014）.「実践（指導、テスト、評価）」『英語教育学の今-理論と実践の統合-』340-353

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 沢谷佑輔	４．巻 23
２．論文標題 SDCモデルと学びのユニバーサルデザイン（UDL）の枠組みによる英語の授業でのICT活用の分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 北海道文教大学論集	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 沢谷佑輔	４．巻 39
２．論文標題 小学校外国語活動における教師の指導上の困難と特別支援―中学校・高等学校の英語教師との比較を通して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要	６．最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沢谷佑輔	４．巻 21
２．論文標題 小学校外国語活動における教師の「学びのユニバーサルデザイン」に基づく実践 ―中学校・高等学校の英語教師との比較を通して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 北海道文教大学論集	６．最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 沢谷 佑輔，小野 祥康	４．巻 10
２．論文標題 学びのユニバーサルデザインの指導が英語教職課程履修学生の授業づくりの意識とICT 活用に対する意識に与える影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 JACET教育問題研究会会誌 言語教師教育	６．最初と最後の頁 95-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 沢谷佑輔
２．発表標題 SDCモデルを用いた教師のICT活用の分析―UDLの枠組みを取り入れた英語授業の実現に向けて―
３．学会等名 2020年度道内3学会合同研究会(JCA北海道支部、JACET北海道支部、HELES)
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関